

あそび 7  
2008





心經の無の字の十余字沙羅の花  
石井

心經の無の字の十余字沙羅の花

武井石艸

あを

七 月



まだ会はぬ人を悼みて 一句

本三宮前

佐藤喜孝

とどまるとおもひしものを花笈  
花に入る蝶は睫を大切に  
草屈<sup>かまり</sup>春は眞晝の縁の下  
お位牌をひとつにまとめさくらんぼ  
わが顔をおもひゑがけず梅雨の雲

木下闇はぐれ子リスの不安顔  
忘却などありえぬ戦火五月の夜  
ブーメラン帰って来ました母の日に  
ふるさとに絆うれしくビール酌む  
つとに受く批判適確青嵐

宝仙寺前

芝宮須磨子

軒瓦巢藁はみだし春夕焼  
箱めがね地球の揺れてゐるやうな  
さくらんぼ三つ残りぬのこしおく  
春月が照らふこの谿跳べとこそ  
ひこばゆる痴呆の母よ見えますか

輪島 定梶じょう

ゆつくりと歩きなさいと山法師  
青葉風富弘美術館閑かなり  
クール便アスパラガスは五月色  
パソコンと飾兜が並びけり  
柏餅よちよち歩む翔馬くん

所沢 須賀敏子

本三宮前

鈴木多枝子

海渡る黄砂に楯の何もなし  
戦争もテロもなき日々花日和  
花散りてすでに実梅の容あり  
恋猫に昭和の家は闇深し  
国展に知人の名前桐の花

夏つばめジーンズの裾ほとびぬる  
血縁のうとましき日や桐の花  
グラビアの太宰治のひとへもの  
水吸うておもたくなりぬ柿の花  
胡瓜の花しをれるまへの全き黄

浦和

竹内弘子

母の日

背やはき月光菩薩春ふかし  
親に似て口下手母の日の電話  
老の日は無風に似たり冷奴  
心太わらってゆるす物忘れ  
桐の花咲き出し広き駐車場

田端 田中藤穂

白鷺

白金に白鷺翔る五月かな  
水亭に円窓白鷺つつと立つ  
黄金の足を揃へて鷺飛翔  
黒坊の名残香ききて炉を塞ぐ  
筍の臍三尺が茶室押す

白金 東亜未



薫  
る

四日市

長崎桂子

舗装なき昔を残す風薫る  
父の地の手塩にかけし新茶かな  
茄子胡瓜旬と言ふ語を如何やうに  
なまくらに初夏の野菜の乱れをり  
十薬を生けて消臭花いとし

妻にとつて句集がらくた半夏生  
源流へ水無月の雲とさかのぼる  
森林浴寄れば大樹の陰にこそ  
ゴキブリが垂直に下り夏はじまる  
通り魔や泰山木の花は焦げ

余丁町

堀内一郎

牡丹

新宿 森山のりこ

音も無く牡丹崩るる石の階  
牡丹の崩るる時や女体めく  
牡丹の赤は少女の如き色  
友と観る今年の牡丹眼にきざむ  
新しき杖に替へた日牡丹観る

銀蜻蜒

上高田 森理和

蜻蛉生る新たに二匹合せて十  
夜通しの蜻蛉の羽化は徒手体操  
闇に羽化未明に蜻蛉乾ききる  
蛻に抜け殻重ね銀蜻蜒  
銀蜻蜒殻に二本の臍の緒を

新緑や吸ひこまれゆく犬とわれ  
風若葉少年の顔輝けり  
どくだみの白き十字や雨あがる  
夏初め魁夷の青を着てみたり  
竜舌蘭空に咲きしを眺めをり

見沼 山莊慶子

中国

西太后の巡りし庭に酔芙蓉  
古宮の叢連なる大夕焼  
兵馬俑それぞれの顔夏館  
楊貴妃の棟々簾連ねたる  
太鼓橋くぐりて涼し蘇州かな

本三西 吉成美代子

まむし草

鹿手袋

渡邊友七

目覚めては夢の声かとほととぎす  
妻居ねば秒音溢る夜のおぼろ  
光りみな茄子にあつまる梅雨厨  
梅雨きざし折れて無色のまむし草  
初蛙枯木のごとき老母訪ふ

極小の靴遠浅の夏の浜  
ウエディング・キスと牧師叫べり夏の雲  
背を晒し芝生広場の昼寝かな  
乳母車時折裸足跳ねてをり  
木・草・花の名前教はる薄暑かな

清瀬

赤座典子

桜ヶ丘  
安部里子

梅雨の入り本読む時を賜りぬ  
聞き手得て記憶あふるる五月尽  
横綱に品格求む五月鯉  
梅雨茸の突然二本物好きな  
梅雨の月地蔵菩薩を彫り始む

向島  
遠藤  
実

山吹のひそやかに吸ふ月あかり  
逃水や振り込め詐欺の声の罨  
東京に空はないとか水芭蕉  
筆談にありがたうあり釣忍  
子を叱るあとの淋しさ枝の梅

名古屋 王 岩

中国や涙の五月十二日  
白薔薇や主失ひしランドセル  
泣くなよと歯を食ひしぼる薔薇の雨  
夏の空五星紅旗の半旗かな  
廃墟にも青葉若葉の光あり

菖蒲揚げおぼろの記憶たぐり寄す  
どくだみの生ひ茂るまま住み暮す  
濡緑の手斧のあとや青葉闇  
夕立に目覚めてはたと本を閉じ  
うかれ猫生垣くぐり何処へか

逗子 鎌倉喜久恵

川崎 木村茂登子

貼るカイロ一枚のこし四月尽  
スローライフ五日を過ぎて菖蒲の湯  
つつじ満開何も彼も良く過ぎし日よ  
花菖蒲源氏ゆかりの名をもてる  
鍵かけてさて一呼吸五月晴

銀座 篠田純子

観覧車で目薬をさす薄暑かな  
発電のつばさの止まる夏はじめ  
山法師性善説を信じをり  
新樹光法務省より僧侶出づ  
三日間胡瓜のパック転職す

バラ眞紅寝ころぶがごと轉びけり  
十葉のそこはかとなき夕あかり  
竹の皮終に一枚脱いで竹  
何やらむ忘るるばかり小猫抱く  
風邪の身に温き豆飯届きけり



千駄木

芝

尚子



## 六月作品より

田中藤穂

巻貝がごろんと倒れ春の海  
貌鳥のうしろから見る水鏡

佐藤喜孝

ていて、気品のある作品と思います。

若人に手を添へられて花の山

芝宮須磨子

一句目は今眼の前に見ているような詠み方で、読む方にもその気にさせてしまうのが、楽しい句だと思えます。

二句目、貌鳥は郭公のこと、一説には美しい春の鳥と歳時記にあります。この場合後者の方にとろうかと思えます。

清澄庭園に行った時、大きな池の汀の石の上にきれいな小鳥が遊んでいて、丁度この様な光景があつたように思えます。後に立った自分の顔や姿も水に写ったのを、水鏡の一語でまとめられたのに感心しました。

石佛や露草の露消えやらす

芝 尚子

古い石佛と、露草とその露が無理なく詠まれ

花月夜暮坂といふ在所かな

定梶じょう

お花見に行った花の山の登り降りや、若い人が手を添えて面倒をみてくれた。その有難さ心強さ、花も一層美しく見えたよいお花見だったことでしょう。

じょうさんは輪島の方である。輪島は以前旅行で通つたことはあるが、私はその土地にあまりくわしくない。この句は、花月夜・暮坂・在所というムードのある言葉が次々と出てきて、言葉のムードに酔わされてしまう。ことに暮坂。実名なのであるうか。暗闇坂の名は東京にもあちこちにあるけれど、暮坂の名は知らない。どんな處なのか、花月夜に訪ねてみたい気

がする。

### 腰痛の消えてはもどる桜冷え

鈴木多枝子

消えてはもどるに実感と哀切感がこもる。桜の頃はぼかばかと暖かい日があるかと思うと夜がぐっと冷えこんだりするので、体の調節がむずかしい。どうぞくれぐれもお大事になさってください。

### 蛇が来と夜の口笛をたしなめらる

竹内弘子

昔は、夜口笛を吹くと、蛇が来るからよしなさいと、親や年寄りからいわれたものだ。その他夜爪を切るなどか、本をまたぐと足が曲がるとか、御飯を食べてすぐ横になると牛になるのもその類か。あれは躰のためだったのだろうか。

近頃都会では蛇もいなくなつたし、生活が昼夜の区分がうすれてきた。掲句のようなやりとりが生活の中にあつた頃が、とても遠い日のようにも、懐かしくも思われる。

### 三光坂古地図にもあり芽山椒

東 亜 未

四月のあをの吟行は、田端駅北口前にある田端文士村記念館を見学して、そのあと拙宅で句会が行われた。その折、江戸末期に発行された古地図をお目にかけてところ、皆さん自分縁のある地のものを手にとつて熱心に見ておられた。東亜未さんは三光坂を探しあてたのでしよう。紙魚に少し食われた、古地図と、萌えだした緑の芽山椒の取り合わせが巧みです。

### 犬を呼ぶ口笛らしき春の闇

早崎 泰江

春の闇の中から鋭い口笛がきこえた。誰かが犬を呼んでいるらしい。作者は家の中でそれを聞いているのか、見えてはいないのだがその状況は読み手にもはっきり浮かんでくる。春の闇がいい感じを出している。

### 墓を出て紋白蝶になつてゐる

堀内 一郎

最近 “千の風になつて” という歌が大流行し

ている。私のお墓の中に私は居ませんという歌だ。私は風になつたり、光になつたり小鳥になつたりして、懐かしい人達の傍らに帰つてゐる。私も此処で庭を眺めていると、いつまでも飛去らない蝶や、毎日一羽で必ず来る雀など、誰かの化身のような気がするがよくある。亡くなつた人が、お骨になつて冷たい墓の中にいるとか、遠い遠いあの世へ行つてしまつたと思うよりも、何かになつて、今の世に居る人の身近にいると思う方が、明るく優しく楽しいことだと思ひますが如何でしょうか。

### 寝落つ間の山音太り青葉木菟

渡邊 友七

川端康成に山の音という小説がある。風のそよともない日に、地鳴りのような耳鳴りのような音をきいた。遠い風音に似ているが、風の音でも海の音でもない。魔が通りかかつて山を鳴らしていったかのようにであつた。と書いてある。

友七さんも山の音をきいた。そして寝落つまでの間にその音は始めより強くなつたようだ。青葉木菟の声もまじつてゐる。寂寞とした闇の中の、夢かうつつか……

### 龍之介の嘆きたる坂春埃

赤座 典子

年譜を見ると芥川龍之介は大正二年二十二才の、東京帝国大学英文科に入った年の七月に田端へ移つてゐる。養父母、伯母と一緒である。そのとき学友に出した手紙に、田端駅から家へゆくまでにかんりの坂があつてきついと書かれてある。その辺りは一面葎畑だとも書いてある。その坂は、田端文士村記念館の裏側にある江戸坂のことである。

先日、田端吟行の折、其処を典子さんと歩きながらその話をした。典子さんは早速それを一句にされた。龍之介がその手紙を書いたのはこれこれ百年近くも前だが、春埃で一氣にそれを今に結びつけたのが見事である。

## 高齢者下に下への四月かな

安部 里子

何のことだろうと一瞬思ったが、すぐに後期高齢者問題とわかった。今年の四月から健康保険を、七十五才以上の人を後期高齢者と名付けて区別したのだ。急のことで、その中身は私はまだよく解らないが、ネーミングだけでも血も涙もない感じで、高齢者達は怒っている。

下に下にと通る大名や代官の籠に、下下の者が飛び下って平伏したのは昔のこと。でも平成二十年の現代でも、為政者やお役人の頭は昔とあまり進化していないようで困る。

この句は時が過ぎると分からなくなるかも知れないが、こういう社会性のある句を臆さず作って出される里子さんを誉めるべきだと思います。

## あたたかや文士の古き相関図

篠田 純子

田端文士村記念館で見られた文士や芸術家達の付き合いを詠まれたものでしょう。ある時期

の田端は本当に多くの著名人が住んでいて、その往来は濃密なものがあつた様です。前に私が見て感心したのは、芥川家が、お隣りの香取真から到来物のお裾分を届けられて、それに龍之介が巻紙に筆でさらされとお礼状を書いて、最後に俳句一句が添えられているものです。

持つてこられた奥様か女中さんを待たせて書いたのか、それとも後で香取家の郵便受に入れたのでしょうか。電話もまだそう普及していなかったその頃は、みな生身で訪ね合い、友人を連れていつて引き合せ、裕福なパトロンは芸術家達を連れて旅行したりもしたようです。

芥川家の二階の書齋澄江堂（我鬼窟）では面会日を決めて訪問者を受け入れ、錚々たる文士、詩人、俳人が集まったようです。

澄江堂寝ねしにあらず蟲しぐれ 瀧 春一

関東大震災（大正十二年）の時は、芥川家のあるこの高台は地盤が固いので、石垣が崩れたり屋根瓦が落ちたりしても家の倒壊したところ

はなかったそうです。その時不穏な流言飛語が巷に流れて町内で自警団を作り、夜も家の前に縁台など出して近所の人が集まり警戒したのですが、龍之介の話が面白いので皆よるこんで集まってきたということでした。

この句のあたたかさは、田端吟行の行われた四月二十日の陽気を言ってもいますが、それ以上に、文士達の交流のあたたかさを指しているように思えます。



## あを吟行会のお知らせ

吟行地 善福寺川緑地

日時 8月17日(日) 午前11時

集合場所 JR「阿佐ヶ谷」駅改札出口

句会場 未定

申込み〆切 8月15日

申込先 佐藤喜孝 09098284244

**阿佐ヶ谷住宅**は、全戸数350世帯の日本住宅公団の分譲型集合住宅。地上3〜4階建て鉄筋コンクリート造の118戸と、地上2階建てテラスハウスタイプ232戸で構成され、うち傾斜屋根型テラスハウスの174戸は前川國男建築設計事務所的设计による。昭和33年竣工。

**善福寺川**は善福寺池を源に中野区で神田川に合流するまでの10kmほどの川。

草色の男になつて水夕べ

佐藤喜孝

庭先に狸悠悠草の餅

芝尚子

新人のきりりと立つや白木蓮

芝宮須磨子

花月夜暮坂といふ在所かな

定梶じょう

花冷えや今朝の挨拶咳ひとつ

須賀敏子

好物の筍飯をまづ供へ

鈴木多枝子

だしぬけに高音発す木の葉笛

竹内弘子

この家は昭和の匂ひ蔦若葉

田中藤穂

文豪の原稿に朱や草若葉

東亜未

飛上がる蒲公英の絮狼煙めく

長崎桂子

犬を呼ぶ口笛らしき春の闇

早崎泰江

なきじやくる迷子もよけれ幟の日

堀内一郎



## 前月作品

春霖や体内時計狂ひしまま	森山のりこ
たんぽぽは球形の絮原一面	森理和
立てられし畝の並びて浅き春	山莊慶子
遠き日の扇小皿や花の中	吉成美代子
寝落つ間の山音太り青葉木菟	渡邊友七
龍之介の嘆きたる坂春埃	赤座典子
黄塵やシルクロードの便りのせ	安部里子
耳痒し税務署員とのむ新茶	遠藤実
漲らふ若葉の命瓦礫より	王岩
木蓮の花びら踏んで庭手入	鎌倉喜久恵
茹でたまご素直に剥けず春の風邪	木村茂登子
土の香や庭の隅より著莪あかり	篠田純子

喜孝 抄



# 近世俳諧と漢詩文 29

王岩

涅槃像ひまゆく駒も見ゆる也

松窓乙二

松窓乙二は宝暦五年（一七五五）〜文政六年（一八二三）。本名は岩間清雄。庵号は松窓である。芭蕉・蕪村を畏敬し、『蕪村発句解』を著す。句集に『松窓乙二発句集』があり、問題の句はここに見える。涅槃像は春季の季語で、釈尊が娑羅双樹の下で涅槃に入る時、頭は北・面は西・右脇下にして臥し、周囲に仏弟子や菩薩・諸天・鬼神・鳥獣などが泣き悲しむさまを描いた絵画。涅槃会に用いられる。

句中における「ひまゆく駒」は『莊子』「知北遊」の

人ノ天地ノ間ニ生クルヤ 白駒ノ隙ヲ過グルガ如ク忽然タルノミ。



に出典する成語である。

「白駒」は、白い馬のこと。「隙」は、すき間の孔。歳月の過ぎ去ること。また、人間の一生は、白い馬が壁の隙間の向こうを走り過ぎるのを、ちらつと見るごとく速く、また、短いものだという。人生の儂く短い譬え。シノニムには「隙駒」「隙の駒」「白駒隙を過ぐ」「隙過ぐる駒」などがある。「涅槃像」に「ひまゆく駒も見ゆる也」という中七下五を取り合わせたところに、意味深長な寓意が秘められるであろう。

乙二が生まれた宝暦五年よりほぼ百年早かった明暦二年（一六五六）に刊行された『ゆめみ草』（蔭山休安編）の中には、編者休安の句が見える。

光陰のたつや隙行駒迎　休安

休安は談林派の俳人で、生没年未詳。本名は蔭山文明である。

「駒迎」は季語で、秋の駒牽きの時、諸国からの貢馬を官人が近江の逢坂関まで出迎えることを謂う。休安は「隙行く駒」と「駒迎え」を巧く掛けて、「光陰の立つや」―「隙行く駒」―「駒迎え」というふうに、句の流れを組み合わせた。言語上の遊びが見られる。

半掃庵也有著『蟻つか』の中にも下記の句がある。

枯野に馬の駆る画

野は枯て隙行駒の猶早し　也有

也有は横井也有で、元禄十五年（一七〇二）〜天明三年（一七八三）。別号に野有や蓼花巷や知雨亭や半掃庵や羅隱などがある。句題から分かったが、枯野を疾走する駿馬の図を前にして詠んだ句である。或いはその絵画の賛として詠まれたかもしれない。『莊子』に出典した「隙行く駒」という成語を巧く句中に組み合わせた、「枯野奔馬の図」に相応しい題賛であろう。

『成美発句集』の中にも「白駒過隙」という成語を句題に詠んだ句がある。

### 白駒過隙

年くれぬ上野の桜今の事 成美

休安・也有・成美・乙二は『莊子』に出典した「白駒過隙」という成語を詠み続けた。



松窓乙二

錢さげてあらはしたなや薺買  
さほ姫のたぶさの風か少しづゝ  
子を呼に出て子をつれて梅夕  
海苔汲めば鴟来るなりちらほらと  
霞戸や死んだふりしてけふも寐ん  
春病中吟の雨心はぬれて古郷へ  
手習に越しはむかし春の山  
なぐさみや茅花あつめて枕にす  
雀子や家のうしろは浅茅原  
包まれてしづまる虻や白い紙  
花散るやつぼつぼと鳴る水の奥  
面買ってくれて子は寐て春のくれ  
龍宮でつく鐘の音歟 五月雨  
あぢさゐや仕舞のつかぬ晝の酒  
其親成美が幼き娘の一めぐりに申つかはすにその子とゝきし合歡や咲  
不足ぞとおもふ朝なし麻の露  
麻刈や水乞鳥を見て歸る

夕やけのさむるにはやし鶴川人  
はなれ鶴の羽黒の山は日暮たり  
鶴匠らが濁りしといふ夜川かな  
鶯のうしろ見らるゝ暑かな  
露の葉を引さいてみる暑かな  
さびきつて碇のあつし砂の上  
脛高くかゝげし人も風薫る  
月さして歸るもありぬ墓参  
我箸も芋殻にかぞへまぎれけり  
親にのみ蚊屋つる家ぞ萩いそげ  
曼珠沙華遊ぶ鳥さへもたぬ也  
我丈古禪師の手向ケにあまりてさびし女郎花  
芋あふる烟疎癩老人が山房を訪ふにつれて去れしな  
露寒し我足あとを又歸る  
あきかぜや白き雀をけさもみる  
さむしろや秋の戸口の日南水  
冬草やはしごかけ置岡の家  
水鳥の嘴にかゝれり暮の波  
朝茶のむうちは居よかし冬雀

# ペルー

須賀敏子

葉ざくらやペルーへ向ふ粗衣のまま

出迎へはフォルクローレと濁り酒

地上絵にセスナ傾き風光る

マチユピチュに雨期の終りの二重虹

天空のマチュピチュ四月は花の季

阿国忌やマチュピチュ村で誕生日

着生のカトレア愛でしインカ道

皇帝も兵も幻花さぼてん

朝焼の空に近づくチチカカ湖

ウロス島瞳輝く子ら裸足

薯畑遠くアルパカ草を喰む

# あをかき集

## 竹内弘子選

(六人目以降五十音順)



播鉢へ妻よ母の日ひざまずく

定樞じょう

軽鳧の子の一羽が減つてゐて元氣

上り鮎動かぬ石も個々光る

鉄棒の支柱の根っこ蟻の穴

初夏の海玩具のやうな電車乗る

田中 藤穂

観覧車向合ひて坐す卯月かな

上げ汐の注意放送からす麦

大麦も混じりて風の罌粟畑

叩き付けパン生地捏ねる五月かな

森 理和

泰山木深々とマンション現場

叔父危篤蚕豆熟るるままにあり

スキップで往復葉書さくらの実

遊歩道葉桜となり天見えず

鎌倉喜久恵

月見草ひとそと荒屋を囲みけり

匂袋かすかに香る初拾

おみくじの男結びに蜘蛛の糸

最上部で軋む薄暑の観覧車

篠田 純子

冷たさの肺に残れりみどりの夜

東京タワー高かった頃さくらんぼ

白シャツや水上バスの操舵室

外表にしてたたむ地図花十葉

刈られたる躑躅並木の台座めく

赤座 典子

吟行といふ小さき旅夏帽子

芝 尚子

夏の風邪ゆらりと終へる一仕事

憂きことも嬉しきことも更衣

柏餅律儀に食める五日かな

團子坂行く身に夾竹桃優し

雷を背に犬を小脇に人走る

夏つばめ洗面臺をぴかぴかに

五月波誰かを誰か知りたくて

安部 里子

芝桜真正面に武甲山

須賀 敏子

朗読の声うら返る青嵐

春蟬のまだ静かなり奥武蔵

五月雨のピアノソナタの音更けて

田の芹を摘んで並べて爺の店

順番のお行儀のよき燕の子

母の日や子に祝はれて母恋し

働きてまた働きて藤の椅子

遠藤 実

佇めば六腑を抜ける青田風

鈴木多枝子

等椅子や科すかに残る脂粉の香

春國展出て六本木ビル仰ぐ

暮れかかると寺院あまねく花あぢさゐ

明易し夢に見し人覚えなく

父の臍お灸のあとや走り梅雨

妹によく似た薔薇の咲きにけり

カルメンの唇に真紅のバラの刺

木村茂登子

雉子の声藪の向かふを小走りに

東 亜 未

百本の脛の躍動御輿渡御

水源の開かれ山荘ざわめけり

はんなりと羅召され月光像

山葵の花つまみて口に香を放つ

ブーメラン薫風裂いて凱旋す

玄ぐろと蓼科山に雪残る

潮入りの湖まで寄せる卯波かな

長崎 桂子

せせらぎの石はなめらか目高集ふ

木霊して山坂に初夏降りそそぐ

滴りを存分に吸ふ崖の蔦

梅雨晴間足湯に並ぶ車椅子

森山のりこ

海見ゆる丘一面のつつじかな

登ほど色さまざまにつつじ山

荒るる地の聖火の行方五月尽

溪流に落ち込むやうに山つつじ

吉成美代子

春の空引裂くやうにへりコプター

小さき花選んで舞ふや揚羽蝶

見る人もなく園に咲き散るうつぎ

月光に濡れて麦笛の音澄めり

渡邊 友七

かざす手の脇より五月の風抜ける

炎天の言葉継ぎゆく石畳

蓮一葉田の紋章として浮ぶ

## 選ををへて

最上部で軋む薄暑の観覧車

篠田 純子

冷たさの肺に残れりみどりの夜

「観覧車」という「エデンの東」のJ・ティーン

とジュリー・ハリスの場面を思い出す。

ボックスに並んで坐っている兄の恋人ジュリーに

顔を近づけてゆくところ。たしか止ったままの観覧

車の最上部だったと思う。

小学生だった純子さんが、リアルタイムで観たと

思えませんが、主人公の俳優が車の事故で急死した

ため、繰り返し上映されたのでご覧になっているか

も知れません。

五月の定期検診で、苦手な肺活量の検査の遣り直

しをさせられました。深く息を吸って、それを全部

吐くというものですが、いくら吸っても吸いきれず、



吐ききれませんでした。

次句、その肺が意識されました。「みどりの日」が「昭和の日」になったので本来の緑ととらえればよいと思いました。感覚的な魅力のある句です。胸の悶えがとれた気がしました。

播鉢へ妻よ母の日ひざまづく 定梶じょう

台所の板の間に、綺麗なぞうきんで固定された「播鉢」胡麻を炒る香ばしい匂いがしてくると、呼ばれるまえに行つて播鉢を両手で支え持つ。山椒の木で作つた播粉木は、いま思うと曲つているように使い良さそうに減つていた。薄味で煮ておいた野菜の汁気をしぼって砂糖や味噌で味をつけた胡麻と和える。

「胡麻和え」ではなく「胡麻汚し」と言った。

「ひざまづ」かれたのは、使い込んだ「播鉢」や「播粉木」に対してと解釈しました。

祖母、母、叔母などの面差しがかさなります。白

胡麻や豆腐で作つた白和えはご馳走でした。

初夏の海玩具のやうな電車に乗る 田中 藤穂

三月に行つた三浦半島は佐島の、天然自然の海岸とことなり「東京ディズニーランド」に隣接した「葛西人工海浜」です。「玩具のやうな電車」や「観覧車」に乗られたのです。

カラフルに塗られた箱のやうな小さい電車。

「初夏」の海に溶け合つて、ほんとうに楽しそうな藤穂さん。

お住居が上野に近い山手線の駅から数分という高台で、石段の上り下りが常であるため脚力が養われ、身軽に出掛ける習慣があるのだと思いました。

叩き付けパン生地捏ねる五月かな 森 理和

三十年余り前、住んでいた団地で「パン」を作ることが流行つた。「叩き付け」で一瞬にして当時の光景が甦つた。手に入れにくかつたイーストを分け

合って、しつとりまとめた小麦粉の塊りを繰り返し叩き付けては捏ね上げる。ぬるま湯で膨らませ、ガス抜いて成形する。2DKいっぱいに香ばしいパンの匂いが立ちこめた。ちょうどいま頃の季節だった。〈スキップで往復葉書桜の実〉も好き。

### 月見草ひそと荒屋を囲みけり

鎌倉喜久恵

夏の暮れがた、白い四弁の花をひらき、翌朝しほむと紅変する。北米原産。同じ帰化植物で「マツヨイグサ」「オオマツヨイグサ」は黄色で丈が高い。以前から叙情的な詩や歌にうたわれ、混乱を来している向きもあるようですが、掲句が本来の「月見草」です。

「荒屋」は、文字どおり手入れのされない家、というより人の住んでいない家で、そうでなくてさえ儂げな「月見草」が、その「荒屋」を囲んで夕闇に灰白く咲いているのです。

### 雷を背に犬を小脇に人走る

赤座 典子

「雷」に追われている感じが面白い。散歩させていた小型犬を抱えて走り出したのでしょう。いつの頃からか飼犬のほとんどが小型犬になりました。家や庭が狭いこの辺にふさわしいと思いましたが、ついこの前まで飼っていた中型犬はどこへ行ったんだろうと思うこともあります。大型のボルゾイや、耳を殺ぎ立てたボクサーを連れてあるいている人もいました。洋犬は吠えないし、人にかかることがないので屋敷が広ければ飼いやすいと思います。抱えて走るの小型犬に限ります。

### 五月波誰かを誰か知りたくて

安部 里子

先頃、逗子海岸に吟行した折、磯辺にちらばって句作に没頭している人。久しぶりの海の気を胸いっぱい吸ってそれだけで満足した筆者のような人もいたようです。

遠くの岩影に見えるのは同行した誰かだ、誰だろう、という句意の作品と思いました。

暮れかかる寺院あまねく花あぢさゝる 遠藤 実

世界の気象が異常を来しているように思えるこのごろ、五番目の季節といわれる日本の梅雨は、今が真つ盛りである。鎌倉辺りはとくに紫陽花寺ともいうとおり、どこもかしこも「あぢさゝる」です。「暮れかかる」が一句に陰影を加えています。

ブーメラン薫風裂いて凱旋す 木村茂登子

いつも茂登子さんらしい軽妙なウィットを加えて一句をより味のあるものにしよとなさいますが、このばあい「戻り来る」くらいにしたほうが、深みが増すように思います。

吟行といふ小さき旅夏帽子 芝 尚子

吉行淳之介の短編に、「横丁の煙草屋までの旅」

というのがあるくらいで、一步家を出たら、「旅」といえるかもしれません。俳句をはじめた三十年余り前から「吟行」のたのしさを覚えたのはありがたいことだと思っています。

母の日や子に祝はれて母恋し 須賀 敏子

五月の第二日曜日、アメリカの一女性が亡き母を偲んで白いカーネーションを配り、後に、「母の日」に制定されたという。日本に定着したのは戦後（第二次大戦）らしい。座五の「母恋し」に実感があります。

佇めば六腑を抜ける青田風 鈴木多枝子

ずっと以前、六メートルの道を隔てて前方一面が畑というところに住んでいた。

ちようどいまごろ、よく伸びた「青田」の上を波がうねるように風が渡った。蛙が鳴き夜は螢が飛んだ。宅地造成のために運んできた土の中に川蜷がい

たらしい。小さい榛の木に、クリスマスツリーのよ  
うに蛸が群がった。

雉の声数の向かふを小走りに 東 亜 未

蓼科にある山荘からの眺めでしようか。綺麗な雉  
子の雄が過つていったのだと思いました。へ玄ぐる  
と蓼科山に雪残るも、其処でなければ見られない  
八ヶ岳連峰北端にある火山「蓼科山」の山容を表し  
て余すところがありません。

潮入りの湖まで寄せる卯波かな 長崎 桂子

〳遠つ淡海が転じて〳遠江〈近江に対する古称〉  
この「湖」は〳浜名湖〳ではないかと思いました。  
10年ほど前、湖西市に住む友人を訪ねたことを思い  
出しました。海とつながっていて養鰻場があり、広  
い湖の上に橋が架かっていたことを覚えています。

梅雨晴間足湯に並ぶ車椅子 森山のりこ

温泉場というと「足湯」が付き物のようになって  
います。「車椅子」の方がお仲間で並んで足湯を遣っ  
ていらつしゃるのでしよう。

だんだん全身が温まってきて気持がよさそうで  
す。

溪流に落ち込むやうに山つつじ 吉成美代子

岩の間から枝を伸ばした「山つつじ」は、花の盛り  
になると本当に「落ち込むやうに」こぼれんばかり  
に咲き溢れています。山歩きの醍醐味ですね。朱色  
がとりわけ綺麗です。

「山躑躅」と本字で書きたい花です。

かざす手の脇より五月の風抜ける 渡邊 友七

眩しそうな手をかざしている女の人の、和服の脇  
へ身八つ口を「五月の風」が吹き抜ける図を想像  
しました。上村松園の美人画のようだと思います。

五月の句会

傳 中野区 カフェ傳

豆の花表裏なく刺し花布巾 理和  
 蝶つがひきしむ音きく朝寝かな 喜久恵  
 背やはき月光菩薩春ふかし 藤穂  
 葉枝や回覧板の滞り 弘子  
 日雀啼く上げて下ろして鉄亞鈴 敦子  
 陽炎の底に溺れる金目鯛 寒林  
 夕迫る緋牡丹に濃き闇の色 綾子  
 椎の花鳥居の外はまぶしすぎ 喜孝  
 東京タワーが高かった頃さくらんぼ 純子  
 歩数計七千歩なり牡丹咲く 敏子  
 春の空引裂くやうにへりコプター 美代子  
 夏の風邪ゆらりと終へる水仕事 典子  
 貼るカイロ一枚のこり四月尽 茂登子

調 さいたま市岸町公民館

爆発するまへに風船売ってしまふ 弘子  
 夏の蝶つぶてのやうに風の前 綾子  
 新緑や吸ひ込まれゆく犬とわれ 慶子  
 風を待ち風をとらへし蜘蛛の旅 藤穂  
 白亜紀から吹いてくる風椎若葉 喜孝

あを吟行会

葛西臨海公園

お父さん砂のママごと夏の浜 東亜未  
 上げ潮の注意放送からす妻 藤穂  
 やどかりや干潟ぶつぷつ息をして 綾子  
 日盛りウエディングキス敵かに 典子  
 最上部で軋む薄暑の観覧車 純子  
 パクトレイン乗って行きます夏の海 美代子  
 風のきて目をつむりたる虞美人草 喜孝

七座句会

中野・小川苑

山法師明るき風の吹き上ぐる 綾子  
 半天をうすむらさきの棟かな 恭子  
 空中にきりぎしがあり薔薇垂らす 木枯  
 母の日の真つ赤な巾着印傳屋 理和  
 夕焼る明日は燃すものなきごとく 東亜未  
 草いきれ草も必死に生きてをり 寒林  
 竹の皮終に一枚脱いで竹 尚子  
 忘却などありえぬ戦火五月の夜 須磨子  
 心太わらって許す物忘れ 藤穂  
 わが顔を想ひ描けず豆の飯 喜孝  
 もの忘れしているような蛍の夜 夏子

連句勉強会 八月第一日曜  
希望者は 佐藤喜孝まで  
(090-9828-4244)

傳句会 毎月第3火曜  
カフェ傳 森 理和  
(03-3368-4263)

調句会 毎月第3金曜  
岸町公民館 竹内弘子  
(0488-86-3501)

あを吟行会 8月17日  
善福寺公園  
佐藤喜孝 (090-9828-4244)

七座句会 毎月第4火曜  
小川苑 吉弘恭子  
(090-9839-3943)

## ◎「最初の記憶と俳句集」◎

完成のお知らせ

原稿をいただいてから思はぬ日時がかかりました。ご海容の程を。当初の計画と違ひ四三三頁の大冊になりました。製本以外のプリント・丁合・装丁は私と吉弘恭子二人の手作りです。なほ、一冊ごとに装丁が違います。ご了解下さい。



限定六十部。一冊五千円。

申込先 あを発行所へ

今月の短冊は武井石艸画伯。私の俳句の最初の先生である。この短冊は病を得、リハビリの後、筆を手にした作品。最晩年、仏教に関心を深め仏像を彫つたりもした。般若心経に無の字がいくつあるか数えたら二十一字あった。「心経に無の字二十一冨返る 渡辺よし生」なる句も世にあつた。「十余字」の大らかさにしくはない。表紙の猫は先月号のこちらをうかがつてゐる写真から一週間後の姿である。まだ身体に手を触れさせないが、我家の自転車のタイヤに爪を立てるのが日課になつた頃である。(喜孝)

二〇〇八年七月号

発行日 七月七日

発行所 東京都中野区中央2-50-3

電話 090-9828-4244

佐藤喜孝

印刷・製本・レイアウト 竹徳房

カット／恩田秋夫・松村美智子

表紙・佐藤喜孝

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

郵便振替 00130-6-55526(あを発行所)

乱丁・落丁お取替えます。

「あを」入会ご希望の方は下記まで。

自選作品は5句（作品により添削あり）

「あをかき集」は7句投句。

普通会员 10,000（年間）

インターネット会員（冊子無し）

5,000

連絡先

[satou.yositaka@rouge.plala.or.jp](mailto:satou.yositaka@rouge.plala.or.jp)



Café 傳

中野区上高田 1-1-1

03-3368-4263